

母子保健における助産婦のあり方に関する研究 産後ヘルパーのニーズ調査

丹羽 勝子* 中山 紘子** 小山田 千代子***

要 約：産後ヘルパーは、産後の支援を目的に10年余り民間で活動している、家庭を一定期間訪問して支援をする者であり、子育て経験者を中心に有資格者もいる。活動地域が全国的な広がりを見せている今日、産後ヘルパーの実態を把握し考察することを目的に、①産後ヘルパーの利用目的 ②受けている支援内容、③利用後の評価、について全国13地域でのヘルパー利用者を対象に、ニーズ調査を行なった結果、以下のことがわかった。

- (1)時代のさまざまなニーズが生んだ産後支援のあり方のひとつとして期待されている。
- (2)産後ヘルパーは、①産後の心身への理解と対応が出来、②乳幼児の世話や育児の指導・相談相手として十分な内容があり、③家事処理能力にすぐれている、の3つの要素を持つ産後支援のプロとして高い評価を得ている。
- (3)一定期間くらしを共にする者として、人としてのありようが大きな意味を持つ産後の支援は、家事・育児の豊かな経験をベースに多方面の母親理解と技術が求められる。産後ヘルパーの資質と能力の向上が必然的に大きな課題となる。
- (4)ニーズは大きいものの、利用するには経済的な負担もあることから個人利用のあり方については今後何らかの対応策が必要である。

見出し語：産後ヘルパー、産後の支援

研究方法：対象者は産後ヘルパーの利用者200人（初産婦82人 41%、経産婦118人 59%）で、首都圏居住者126人（63%）を中心に、近畿、名古屋、仙台、岡山、熊本、高松の各地域の利用者である。事前に協力を依頼してアンケート用紙を郵送し回収・集計したこともあり、回収率は100%であった。なお、各地域の産後ヘルパーは同一系列の企業に属している。

*母と子の研究所 **育児支援グループ ***赤ちゃんとママ社

結 果：①産後ヘルパーの利用目的
産後ヘルパーからの産後の支援を必要とした目的は、産後1か月間の家事・育児に“実母の手助けが得られなかったため”が164人(82%)と最も多く、次いで夫、義母等近親者からの支援が得られなかったことが利用の直接的な動機となっている(表1)。この時期の主な家事・育児をした人は産後2週目(退院後1週目にほぼ同じ)が、産後ヘルパー142人(71%)、実母 54人(27%)の順で、産後3週目はヘルパー164人(82%)、実母 32人(16%)となっており、ヘルパー利用率と実母不在率はそれぞれの時期でほぼ一致している(表2)。次に、実母・義母不在の理由は遠隔地居住67%、就業35%、高齢等のほかに、義母・実母の支援は“気疲れする”41%“頼みにくい”28%“家が狭い”などがある。また、親世代が“いまの育児を知らない・育児知識が古い”10%もあり、親世代の持つ育児情報・知識・技術・指導では満足できない、とするいまの育児事情の指摘があった。これらさまざまな手伝ってもらいたくなかった理由が重なった実母・義母の不在もあり、とくに義母の場合は上記の理由によるものが実母より多くみられる(表3)。そして利用目的の中の“外部からの支援を利用しお金で解決したかった”52人(26%)とする若い世代の意向もうかがわれた。また、“家族にすすめられた”利用者は30人(15%)いた(表4)。ちなみに入院中の家事・育児者は、上の子の世話を中心にした育児・家事のために義母26%実母24%、近親者の順で、ヘルパーの利用は4%とわずかであった。夫の支援も入院時が最も多く(49%)この時期に夫が手伝えなかった理由は“仕事で

忙しい”151人(75%)、“育児休暇がない、または少ない”32%、“家事・育児ができない”26%(表3)となっている。

一方で、支援内容そのものを利用目的としても回答しており、(表4)の通り“家事をしてもらいたかった”が137人(69%)で、家事の中では食事のこと、掃除、洗濯、買物の順に希望が多い。また、“自分の心身の休養のため”と回答した母体の休養を利用目的にした人が119人(60%)、次いで育児に関することで“上の子の世話をしてほしい”が経産婦の48%、赤ちゃんの世話や育て方の指導を求めたのは初産婦の、それぞれ45%40%、育児不安、母乳不安のためがともに初産婦の15%となっている。

②利用者が受けた支援内容

産後ヘルパーの利用者が実際に受けた支援は、当初利用者自身が支援を受けたいと希望していたものよりも、さまざまな場面で多くの手助けを受け、家事ではほとんど全員に近い196人(98%)が掃除の世話を受け、洗濯93%、食事のこと91%、買物82%の人が暮らしの基本的な世話をヘルパーからしてもらっている(表5)。また、多くの人が赤ちゃんの世話をしてもらい、沐浴については178人(89%)、抱く・あやす163人(82%)、おむつ交換120人(60%)、肌着や衣類の着脱116人(58%)調乳・哺乳ビン洗い86人(43%)、おへその手当て81人(41%)、授乳・水分の補給は76人(38%)が手助けを受けている。経産婦からは上の子の世話の依頼が多く、留守に預かる93人(経産婦の79%)、上の子と遊ぶ64%、上の子の食事や身の回りの世話を経産婦の42%がしてもらっている。育児の相談についても同じような傾向で、当然のことな

から初産婦からの育児相談は多い。初産婦から産後ヘルパーにした29項目の相談内容をみると(表6)のように、初産婦の約50%は9項目の相談をしている。たとえば、沐浴のさせ方、おへその手当て、湿疹・皮膚のカサカサ、母乳の出について、産後の身体の回復、衣服の着脱と保温、便や尿の質・回数など、しゃっくり・くしゃみ・咳、産後の食事と栄養などの育児や母体の相談をしている。また30%の人は、全部で17項目にわたる相談をし、沐浴のさせ方は全員が相談をし指導を受けている。産後ヘルパーから受けた支援は、利用者の多くがぐらしの世話、乳幼児の世話、育児・母体の相談相手として等その支援は産後に必要と思われる全般的な分野にわたっている。

次に、利用期間や時間についての回答結果をみると(表7)、企業側が基本設定している(柔軟に対応しているが)1日4時間で1週間、10日、2週間のパターンのうち、最も利用の多かったのが1週間、次いで10日、2週間の順であった。しかし、希望する期間や時間の問いには2週間が最も多く、最低でも10日は利用したいとしている。時間は1日4時間、5時間、6時間の順に希望し、支援の時間量、時間帯、期間については多様なニーズであった。

③産後ヘルパーへの評価

上記の世話に関する支援内容20項目について、手助けを受けた人にそれぞれの満足度を聞いた結果は、やや不満(不満も含む)が掃除の19人(10%)、食事の支度が14人(7%)で、あとの18項目についてはやや不満の人が0~4人とほとんどなく、全体に高い評価を得ていると言えよう。

さらに利用者の評価を(1)仕事ぶり・人柄に関する事、(2)今後の利用について、(3)システム等に関する事、の満足度で聞いた結果(表8)、(1)について満足(まあ満足を含む)した人は、仕事への姿勢では193人(97%)、産後の心身への気遣いが190人(95%)、産後の心身についての相談相手として186人(93%)、赤ちゃんの扱い方192人(96%)、育児の相談相手としては189人(95%)、が満足している。感想としての自由記述をみると、「とても親切で赤ちゃんの扱い方が上手な方で安心して赤ちゃんをお任せできました。育児経験のある方が一番ですね」「初産だったのでとにかく育児について話し合う相手がいたことはとても心強かったと思います。慣れない育児に客観的なアドバイスが得られ、それが本当に精神的な安定につながり感謝しています」「産後は肉体的、精神的にも不安定でした。ヘルパーさんの人柄によってホッとすることもあるし、逆に疲れもします。ヘルパーさんから受けた一番のサービスは‘安心’かもしれません」「高齢にもかかわらず母乳がよく出て、子育てがうまくスタートできたのはヘルパーさんのお陰だと思います。テキパキと短時間に家事をし、赤ちゃんや私の体の心配なことは何でも、すぐその場できくことができ、心強かったです」と。また、身体の休まり具合や家事処理能力については、前述のものより満足度は低くなりそれぞれ88%、89%の満足度になっている。やや不満について自由記述から拾ってみると「掃除などはそれぞれのやり方や仕事の流れがあるので、手順などを聞いて欲しかった」「働き者過ぎて気の休まるヒマがなかった」「できればもう少し

手早く家事を処理してほしかった」「いわれなくても自分から気がついていろいろなことに取り組んで欲しい」など、能力や心くぼりの個人差を指摘するものであった。

(2)の今後の利用について(表8)では、自分は利用したい(82%)ものの、友人へも紹介する人は72%で、「どちらとも言えない」が28%であった。自由記述に「やはり若い夫婦にとっては費用がかなり高いので、友人にも紹介しにくいし、自分でも出産費という大金を払った後では、お金が出せるか不安に思います。もう少しいつでも気軽に安く助けていただければ、と思います」といった意見がかなり多く見られた。ちなみに産後ヘルパーの費用負担者は(表9)、自分たち夫婦が128人(64%)、妻の親68人(34%)、夫の親11%の順で、健康保健組合から一部援助を受けた人は1人であった。

(3)のシステム等に関する評価(表8)でも、費用に関しては「やや不満(不満も)」が42%(83人)と、もう少し安ければ、の声が多く聞かれた。設定している仕事内容については、前述したごとと重複するが大きな満足が得られている。設定している時間、時間帯、期間には「もう少し柔軟に選択できれば…」と。また情報量については「初めての利用者にとって当初どこまで、どのようにしてもらえるのかイメージできなかった。利用者の利用の仕方の具体例があったら良かった」など、産後ヘルパーの支援内容とその利用の仕方についての情報量の不足を指摘した声が聞かれた。

考 察：1)産後ヘルパー利用者の多くが産後2・3週目の実母不在を補う目的でヘルパーを

利用したことがわかった。しかし一方で単なる実母代わりではない産後支援の専門性を持つ者としての期待も高かった。すなわち①産後の心身への理解と対応が出来②乳幼児の世話や育児の指導・相談相手として十分な内容があり③家事処理能力にすぐれている産後支援のプロとして期待し、それを高く評価するものであった。

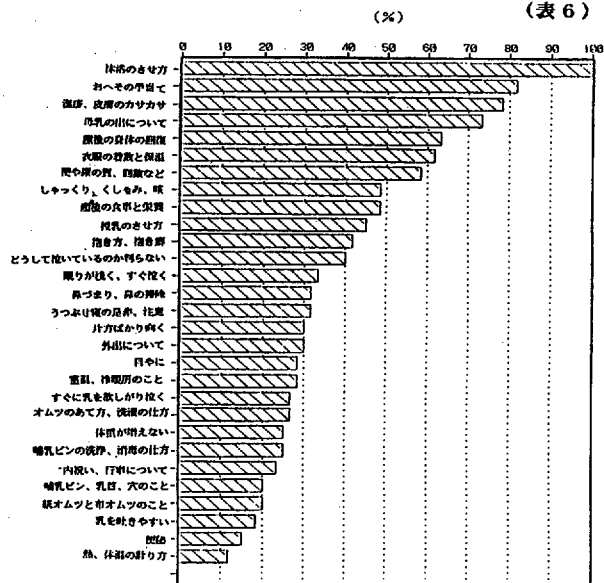
2)時代のさまざまなニーズ、つまり核家族化、就労女性の増加、孤立化する居住環境、育児事情の変化、労働環境の未整備等々が生んだ産後の支援の一つのあり方として期待されている。また、実母代わりは外部のプロの手を借り、お金で解決したいとする若い世代の意識や、育児は専門家の支援・指導が必要とする若い世代の育児に関する意向等は、今後とも産後支援の専門家を求める声の広がりをうかがわせるものである。

3)ともに家事・育児を担うはずの夫は、労働・社会環境の未整備だけの理由からではなく、当然のことながらその支援能力の不足が産後の頼れる存在としてはまだ十分に機能するものではないことを明らかにしている。

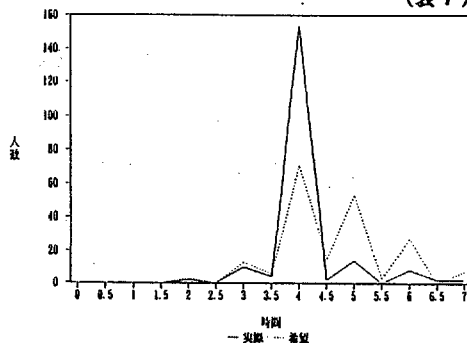
4)産後ヘルパーは、ある期間は家庭でともに過ごす存在となるものであり、多くの場合全人的に頼られることから、その支援は家事・育児の豊かな経験をベースに産後の母親に関する多面的な理解と、専門的な知識や技術の上に成り立つものと考えられる。したがって、ヘルパーの資質や能力の向上にあたっては、助産婦の指導や連携による継続的な研修制度の確立、また利用者の負担軽減の施策等が今後の課題となるものと思われる。

産後ヘルパーへの相談（初産のみ）

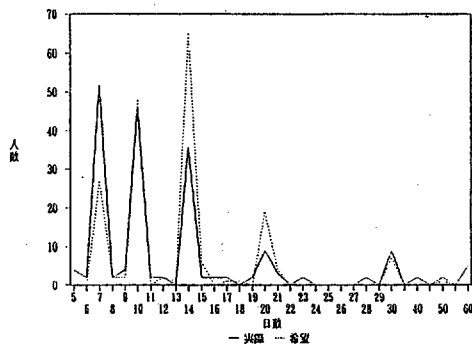
(表 6)



産後ヘルパーの利用時間 (表 7)



産後ヘルパーの利用期間 (表 7)

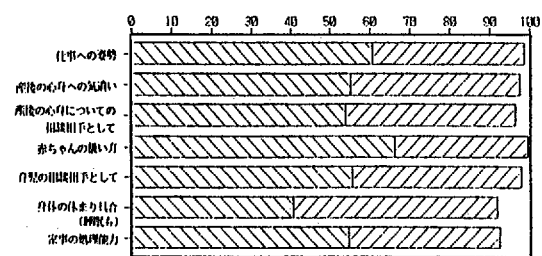


産後ヘルパーへの評価

(1) 仕事ぶり・人材に関すること

(%)

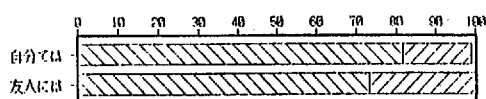
(表 8)



☐ 満足 ☑ まあ満足

(2) 今後の利用について

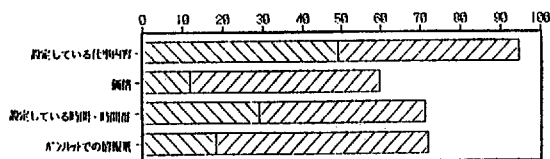
(%)



☐ 利用・紹介したい ☑ どちらとも云えない

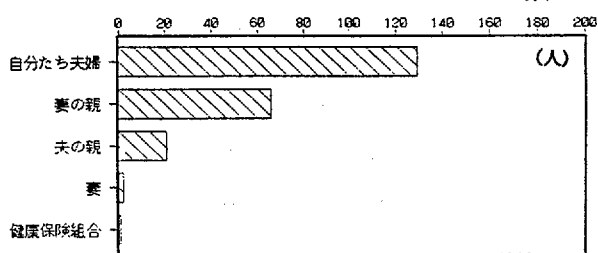
(3) システム等に関すること

(%)

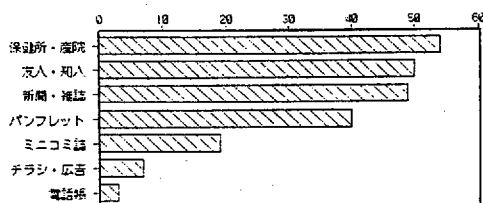


☐ 満足 ☑ まあ満足

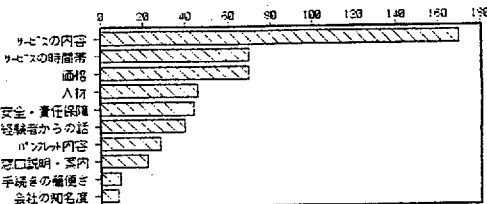
産後ヘルパーの費用負担 (表 9)



(参考) 産後ヘルパーを何で知ったか(人)



(参考) 産後ヘルパー利用にあたって大切にしたいこと(人)



アンケート回答者

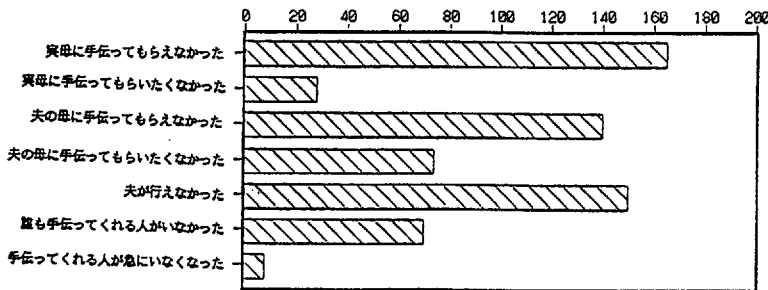
居住地域	年齢層	職業の有無
神奈川県 42人	20代 26%	妊娠前
東京都 34	30代 71	無 120人(60%)
千葉県 21	40代 3	有 80人(40%)
埼玉県 9	同居親族	退職 38人
つくば 20		育休中 25人
		自営業ほか 17人
名古屋 19	子ども1人 41%	利用決定時期
近畿 15	2人 41%	妊娠中 76% (後期 44 中期 21 初期 11)
関西 10	3人以上 18%	出産後 24% (入院中 10 退院後 14)
熊本 11	親(片親も) 11%	住居形態
高松 4	祖父母 3%	集合住宅 68%
仙台 15	姉妹 2%	一戸建 32%

産後1ヶ月の家事・育児者 (表2)

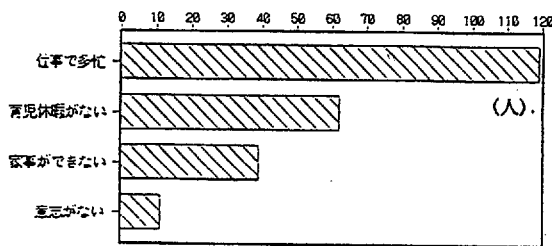
	入院中	産後2週目	産後3週目	産後4週目
実母	(人) (%) 47 (24)	(人) (%) 54 (27)	(人) (%) 32 (16)	(人) (%) 30 (15)
義母	52 (26) 4 (2)	22 (11) 4 (2)	12 (6) 1 (-)	10 (5) 7 (4)
産後ヘルパー その他	7 (4) 7 (4)	14 (7) 4 (2)	16 (8) 3 (2)	8 (4) 3 (2)
夫	98 (49)	50 (25)	48 (24)	44 (22)

産後ヘルパーの利用目的
(1) 支援者に関する事

(人) (表1)

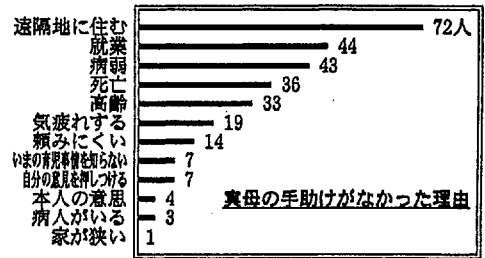
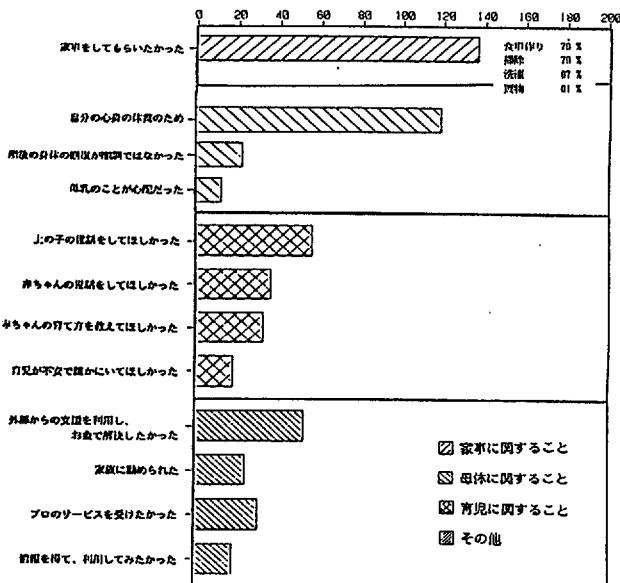


夫の手助けがなかった理由 (表3)

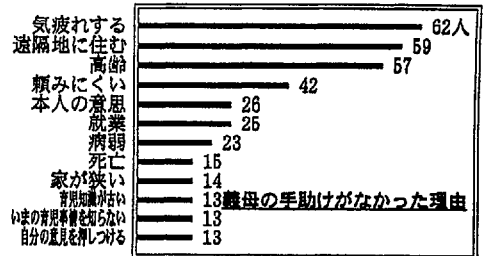


産後ヘルパーの利用目的
(2) 支援内容など

(人) (表4)

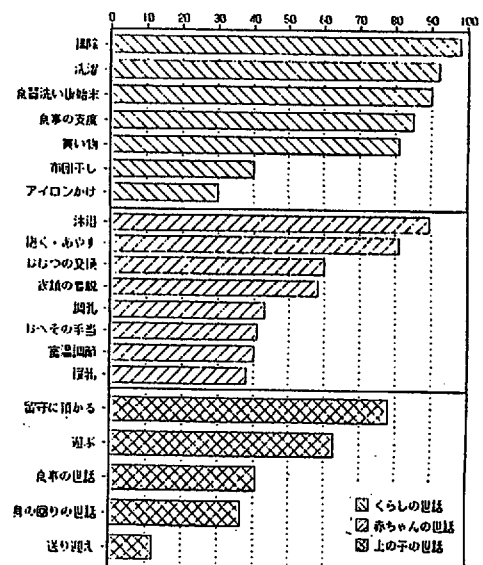


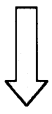
(表3)



手助けを受けた内容

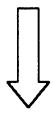
(%) (表5)





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:産後ヘルパーは、産後の支援を目的に10年余り民間で活動している、家庭を一定期間訪問して支援をする者であり、子育て経験者を中心に有資格者もいる。活動地域が全国的な広がりを見せている今日、産後ヘルパーの実態を把握し考察することを目的に、産後ヘルパーの利用目的 受けている支援内容、 利用後の評価、について全国13地域でのヘルパー利用者を対象に、ニーズ調査を行なった結果、以下のことがわかった。

- (1) 時代のさまざまなニーズが生んだ産後支援のあり方のひとつとして期待されている。
- (2) 産後ヘルパーは、産後の心身への理解と対応が出来、乳幼児の世話や育児の指導・相談相手として十分な内容があり、家事処理能力にすぐれている、の3つの要素を持つ産後支援のプロとして高い評価を得ている。
- (3) 一定期間くらしを共にする者として、人としてのありようが大きな意味を持つ産後の支援は、家事・育児の豊かな経験をベースに多方面の母親理解と技術が求められる。産後ヘルパーの資質と能力の向上が必然的に大きな課題となる。
- (4) ニーズは大きいものの、利用するには経済的な負担もあることから個人利用のあり方については今後何らかの対応策が必要である。